

レポート・作文テンプレート集

大学生のための実践的ライティングワークブック

第5版 2024年10月発行

目次

Part 1: レポート作成編

- レポート基本構成テンプレート(5種類)
- 序論・本論・結論の書き方見本
- 段落構成テンプレート
- 引用・参考文献テンプレート

Part 2: 作文・小論文編

- 作文基本構成テンプレート(5種類)
- 効果的な書き出し集 50選
- 締めの文章パターン集
- 描写テクニック実例集

Part 3: 分野別レポート見本

- 文系レポート見本(5種類)
- 理系レポート見本(5種類)
- 実験レポートテンプレート
- 調査レポートテンプレート

Part 4: 実践ツール

- NGワード・OKワード変換表
- 学術的表現集 500
- 提出前チェックリスト

はじめに:このテンプレート集の使い方

効果的な活用 3 ステップ

Step 1: テンプレート選択(5 分) 課題に応じて適切なテンプレートを選ぶ

Step 2: 情報を当てはめる(30 分) 空欄に自分の内容を入れていく

Step 3: 推敲・調整(15 分) 文章を整えて完成

このテンプレート集を使えば、どんな課題も 1 時間で骨組みが完成します。

Part 1: レポート作成編

1. レポート基本構成テンプレート(5 種類)

テンプレート①: 論証型レポート(2000 字)

【タイトル】

「〇〇についての考察 -△△の観点から-

【序論】 (400 字)

近年、〇〇が注目を集めている。[具体的な社会現象や統計データ]によれば、[数値や事実]という状況にある。

しかし、[問題点]という課題が存在する。この問題は[影響や重要性]という点で看過できない。

そこで本レポートでは、[論点 1]、[論点 2]、[論点 3]の 3 つの観点から〇〇について考察し、[目的]を明らかにすることを目的とする。

【本論】 (1200 字)

1. [論点 1 のタイトル] (400 字)

第一に、[論点 1] について検討する。[主張] である。なぜなら、[理由] だからだ。[著者名 (年号)] によれば、「[引用]」(p. ○) という。実際に、[具体例やデータ] という事例がある。これらの事実から、[小結論] と考えられる。

2. [論点 2 のタイトル] (400 字)

第二に、[論点 2] について分析する。[主張] と言える。その根拠として、[データや統計] が挙げられる。[図表番号] に示すように、[傾向や特徴] が見て取れる。また、[反対意見] という見方もあるが、[反論] という点で説得力に欠ける。したがって、[小結論] である。

3. [論点 3 のタイトル] (400 字)

第三に、[論点 3] の観点から考察する。[主張] ということが重要である。[先行研究] では、[知見] が示されている。これを踏まえると、[発展的考察] という新たな視点が得られる。つまり、[小結論] なのである。

【結論】 (400 字)

本レポートでは、○○について [3 つの論点] から考察を行った。その結果、[要約 1]、[要約 2]、[要約 3] ということが明らかになった。

これらの分析から、[総合的な結論] と結論づけられる。この知見は、[意義や貢献] という点で重要である。

ただし、本研究には[限界や課題] という制約がある。今後は、[発展的な研究の方向性] について、さらなる検討が必要である。

【参考文献】

著者名 (年号) 『書名』 出版社名.

テンプレート②: 比較分析型レポート(1600 字)

【タイトル】

「A と B の比較研究 -○○の視点から-

【序論】（300 字）

A と B は、ともに〇〇において重要な概念である。
しかし、両者には「相違点」という違いがある。本レポート
では、「比較基準 1」、「比較基準 2」、「比較基準 3」の
3 つの基準で両者を比較し、それぞれの特徴を明らかにする。

【本論】（1000 字）

1. 比較基準 1 による分析（350 字）

「基準 1」の観点から見ると、A は「特徴 A」であるのに
対し、B は「特徴 B」という違いがある。具体的には、
「A の詳細」。一方、B の場合は「B の詳細」。この違いは、
「違いの意味」を示している。

2. 比較基準 2 による分析（350 字）

「基準 2」について比較すると、A は「数値や事例 A」、
B は「数値や事例 B」という結果が得られた。「表〇」に
示すように、「定量的な差異」が確認できる。この差は、
「原因や背景」に起因すると考えられる。

3. 比較基準 3 による分析（300 字）

「基準 3」では、意外にも A と B に「共通点」が見られた。
両者とも「共通する特徴」という点では一致している。
しかし、「微細な違い」という点で異なっており、これが
「影響や結果」につながっている。

【結論】（300 字）

以上の比較から、A と B は「主要な違い」において
大きく異なることが明らかになった。A は「A の総括」、
B は「B の総括」という特徴を持つ。この違いを理解する
ことは、「実践的意義」という点で重要である。今後は
「発展的課題」についても検討する必要がある。

【参考文献】

テンプレート③:問題解決型レポート(2000 字)

【タイトル】

「〇〇問題の現状と解決策の提案」

【序論】（400 字）

現代社会において、〇〇は深刻な問題となっている。
[統計データ]によれば、[問題の規模]に達しており、
このまま放置すれば[予想される被害]が懸念される。
本レポートでは、まず〇〇問題の現状を分析し、次に
その原因を考察した上で、実現可能な解決策を提案する。

【本論】（1200 字）

1. 問題の現状分析（400 字）

〇〇問題の現状は以下の通りである。第一に、[現状 1]
という状況がある。[データ]が示すように、[深刻度]。
第二に、[現状 2]も問題である。[具体例]のケースでは、
[影響]が報告されている。第三に、[現状 3]という
側面も無視できない。

2. 問題の原因考察（400 字）

この問題の原因として、3つの要因が考えられる。
まず、[原因 1]が挙げられる。[メカニズムの説明]。
次に、[原因 2]も重要な要因である。[因果関係の説明]。
さらに、[原因 3]という構造的問題も存在する。これらの
要因が複合的に作用し、現在の状況を生み出している。

3. 解決策の提案（400 字）

上記の分析を踏まえ、以下の解決策を提案する。
短期的対策として、[対策 1]を実施すべきである。これに
より[期待される効果]が見込まれる。中期的には、
[対策 2]が有効である。[成功事例]でも効果が実証
されている。長期的には、[対策 3]という抜本的改革が
必要である。

【結論】（400 字）

本レポートでは、〇〇問題について現状分析から
解決策まで包括的に検討した。問題の本質は[核心]に
あり、[提案した対策]によって改善が期待できる。

実現には「必要な条件」が不可欠だが、「メリット」を考慮すれば、早急な対応が求められる。今後は「課題」についても検討を深める必要がある。

【参考文献】

テンプレート④：調査報告型レポート(1800 字)

【タイトル】

「〇〇に関する調査報告」

【序論】（300 字）

〇〇の実態を明らかにするため、「調査期間」に「調査方法」による調査を実施した。調査対象は「対象」、サンプル数は「N=〇」である。本レポートでは、調査結果を報告し、そこから得られた知見を考察する。

【調査方法】（300 字）

調査は以下の方法で実施した。

- ・ 調査期間：20××年〇月〇日～〇月〇日
- ・ 調査対象：「具体的な対象」
- ・ 調査方法：「アンケート/インタビュー/観察等」
- ・ サンプルング：「方法」
- ・ 分析方法：「統計手法等」

なお、「倫理的配慮」を行った。

【結果】（600 字）

1. 基本統計（200 字）

回答者の属性は、「性別」、「年齢」、「その他」であった。「図 1」に示すように、「分布の特徴」が見られた。

2. 主要な発見（200 字）

「質問項目 1」について、「%」が「回答」と答えた。これは「予想との比較」である。また、「質問項目 2」では、「傾向」が確認された。

3. 相関関係（200 字）

〔変数 A〕と〔変数 B〕の間に〔相関係数 r 〕の相関が認められた。これは〔解釈〕を示唆している。

【考察】（400 字）

調査結果から、以下の 3 点が明らかになった。第一に、〔発見 1 の意味〕。第二に、〔発見 2 の意味〕。第三に、〔発見 3 の意味〕。これらの結果は、〔先行研究〕と〔一致/相違〕しており、〔理由〕と考えられる。

【結論】（200 字）

本調査により、〇〇について〔主要な発見〕が明らかになった。ただし、〔調査の限界〕という制約があり、〔今後の課題〕が残されている。

【参考文献】

テンプレート⑤: 文献レビュー型レポート(2000 字)

【タイトル】

「〇〇研究の動向と課題 -文献レビューを通じて-」

【序論】（400 字）

〇〇は、〔学問分野〕において重要な研究テーマである。本レポートでは、〇〇に関する主要な先行研究をレビューし、研究の到達点と残された課題を明らかにする。レビューの対象は、〔期間〕に発表された〔文献数〕の文献である。

【本論】（1200 字）

1. 初期の研究（1990-2000 年代）（400 字）

〇〇研究の嚆矢となったのは、〔研究者名（年）〕の研究である。〔主張や発見〕を提示し、〔影響〕を与えた。続いて〔研究者名（年）〕は、〔発展〕させた。この時期の研究は、〔特徴〕という特徴があった。

2. 発展期の研究（2010 年代）（400 字）

2010 年代に入ると、〔新しい潮流〕が登場した。〔研究者名（年）〕は、〔新手法〕を用いて〔発見〕を

示した。また、[研究者名(年)]は[批判的検討]を行い、[修正]を提案した。この時期は[特徴]が顕著であった。

3. 最新の研究動向(2020年代)(400字)

近年では、[最新トレンド]が注目されている。
[研究者名(年)]の[研究]は、[ブレークスルー]をもたらした。現在は[方向性]に向かって研究が進んでいる。

【結論】(400字)

以上のレビューから、〇〇研究は[発展の経緯]という発展を遂げてきた。現在の到達点は[成果]である。しかし、[未解決の課題]が残されており、今後は[方向性]の研究が期待される。

【参考文献】(レビューした文献をすべて記載)

2. 序論・本論・結論の書き方見本

序論の書き方パターン

パターンA: 統計から始める

文部科学省(2023)の調査によれば、大学生の〇〇率は過去10年間で△%から□%に上昇している。この急激な変化は、[社会的背景]を反映しており、[影響]という問題を引き起こしている。本レポートでは、この問題の原因を分析し、効果的な対応策を検討する。

パターンB: 定義から始める

〇〇とは、[定義]を指す概念である。この概念は[起源や歴史]に由来し、現代では[現代的意義]という意味を持つ。しかし、〇〇の定義や解釈には[議論や対立]が存在する。本レポートでは、これらの議論を整理し、〇〇の本質を明らかにする。

パターン C: 問題提起から始める

なぜ〇〇は△△なのだろうか。この問いは、[分野]において長年議論されてきた問題である。従来の説明では[従來說]とされてきたが、[矛盾や限界]という問題がある。本レポートでは、新たな視点から〇〇を分析し、この問いに対する答えを提示する。

本論の書き方パターン

PREP 法による段落構成

【Point - 主張】

〇〇は△△である。

【Reason - 理由】

なぜなら、[理由 1] だからである。また、[理由 2] という要因も重要である。

【Example - 具体例】

例えば、[具体例 1] というケースがある。実際に、[データや事例] が報告されている。[研究者 (年)] の調査では、[数値] という結果が示されている。

【Point - 再主張】

以上から、〇〇は△△であることが確認できる。

結論の書き方パターン

パターン A: 3 点要約型

本レポートでは、〇〇について考察した。第一に、[要点 1] を明らかにした。第二に、[要点 2] を示した。第三に、[要点 3] を提案した。これらの分析から、[総合的結論] と結論づけられる。今後は[課題]について検討が必要である。

パターン B: 提言型

以上の考察から、〇〇問題の解決には「核心」が重要であることが明らかになった。具体的には、「提言 1」、「提言 2」、「提言 3」を実施すべきである。これらの取り組みにより、「期待される成果」が見込まれる。

3. 段落構成テンプレート

基本型:トピックセンテンス方式

【段落の第 1 文：トピックセンテンス】

[この段落の主張を 1 文で]

【第 2-3 文：説明・理由】

[なぜそう言えるのか]

【第 4-5 文：具体例・データ】

[証拠や事例]

【最終文：まとめ】

[段落の要点を確認]

実例:環境問題の段落

地球温暖化対策には、個人レベルでの行動変容が不可欠である。なぜなら、家庭部門からの CO2 排出量は全体の約 16%を占めており、無視できない規模だからだ。環境省（2023）によれば、一世帯あたり年間 4.5 トンの CO2 を排出している。例えば、エアコンの設定温度を 1 度変更するだけで、年間 33kg の CO2 削減が可能である。したがって、個人の小さな行動の積み重ねが、地球規模の問題解決につながるのである。

比較型の段落構成

一方、「対比する内容」という見方もある。確かに「一理ある点」という面では説得力がある。しかし、

「反論」という問題があり、「自分の主張」の方が妥当である。なぜなら「根拠」だからだ。

4. 引用・参考文献テンプレート

本文中の引用方法

直接引用(40 字以内)

山田（2023）は「〇〇は△△である」（p. 45）と述べている。

直接引用(40 字以上)

山田（2023）は次のように述べている。

〇〇は△△である。さらに、□□という特徴も
持っており、これらが複合的に作用することで、
××という現象が生じる。（p. 45）

間接引用(要約)

山田（2023）によれば、〇〇は△△の要因となっている。

複数の文献を引用

この問題については、多くの研究がなされている（山田，2023；
鈴木，2022；佐藤，2021）。

参考文献リストの書き方

書籍

著者名（出版年）『書名』出版社名。

例：山田太郎（2023）『現代社会論』岩波書店。

著者が複数の場合：

山田太郎・鈴木花子（2023）『社会学入門』有斐閣。

編著の場合：

山田太郎編（2023）『環境問題の現在』東京大学出版会.

翻訳書の場合：

Smith, J.（2020）『原書タイトル』山田太郎訳，出版社名.

（原著：Smith, J.（2018）. Original Title. Publisher.）

論文(学術雑誌)

著者名（出版年）「論文タイトル」『雑誌名』巻号，pp. 開始-終了.

例：鈴木花子（2023）「若者の消費行動分析」『社会学研究』

第 45 巻第 2 号，pp. 123-145.

Web サイト

著者/組織名（更新年）「記事タイトル」サイト名，URL

（最終閲覧日：年月日）.

例：文部科学省（2023）「大学教育の現状」文部科学省，

<https://www.mext.go.jp/xxxxx>

（最終閲覧日：2024 年 10 月 1 日）.

新聞記事

「記事タイトル」『新聞名』発行日付，朝刊/夕刊，面.

例：「大学改革の行方」『朝日新聞』2024 年 10 月 1 日，朝刊，3 面.

Part 2: 作文・小論文編

5. 作文基本構成テンプレート(5 種類)

テンプレート①: 体験談型(800 字)

【書き出し：インパクトのある一文】（50 字）

「[印象的な言葉や場面]」－[その瞬間の描写]。

【導入：テーマ提示】（100 字）

私は[いつ]、[どこで]、[何を]経験した。
それは[簡潔な説明]という出来事だった。この経験から、
私は[学んだこと]を学んだ。

【展開 1：きっかけ・背景】（200 字）

きっかけは[具体的な出来事]だった。当時の私は
[状況や心境]という状態で、[課題や目標]に
直面していた。[周囲の反応]もあり、[決意]した。

【展開 2：具体的な行動・挑戦】（200 字）

私は[具体的な行動 1]から始めた。[困難や障害]も
あったが、[工夫や努力]を重ねた。特に[印象的な
エピソード]では、[五感を使った描写]だった。
[数値的な成果]も得られた。

【展開 3：転機・気づき】（150 字）

転機は[具体的な出来事]だった。[誰かの言葉や
出来事]によって、[新しい視点]に気づいた。
それまでの[思い込み]が覆され、[新しい理解]を
得ることができた。

【結論：学びと今後】（100 字）

この経験を通じて、[核心的な学び]を得た。
[現在への影響]であり、[将来への決意]である。
[読者へのメッセージ]。

テンプレート②:意見論述型(800 字)

【問題提起】（100 字）

現代社会において、〇〇は重要な課題である。
[データや事例]が示すように、[現状]という
状況にある。私は、[自分の意見]と考える。

【理由 1】（200 字）

第一の理由は、[理由 1] である。[具体例] を見ても明らかなように、[詳細な説明]。実際に、[体験や観察] したことがある。これは[意味]を示している。

【理由 2】（200 字）

第二に、[理由 2] という点も重要である。
[データや研究] によれば、[事実] である。
私自身も[個人的経験] があり、[実感] している。
[社会的影響] を考えると、看過できない。

【反論への対応】（150 字）

確かに、[反対意見] という意見もある。[一理ある点] は認める。しかし、[反論] という観点から見れば、
[自分の意見の優位性] は明らかである。

【結論】（150 字）

以上から、〇〇について[自分の意見の要約] と結論づける。[社会的意義] であり、[個人としての決意]。
[未来への展望] を描きたい。

テンプレート③: 比較考察型(1000 字)

【導入】（150 字）

A と B という二つの[概念/選択肢] がある。
一見すると[共通点] のようだが、実は[相違点]
という大きな違いがある。私は[どちらを支持/両方の
バランス] という立場から、この問題を考察したい。

【A の利点】（250 字）

A の最大の利点は[利点 1] である。[具体例 A] の
ケースでは、[成功事例] が報告されている。また、
[利点 2] という面でも優れている。[データ] が
示すように、[効果] が期待できる。私の経験でも、
[個人的エピソード] があった。

【B の利点】（250 字）

一方、Bには「利点1」という強みがある。「具体例B」を見ると、「異なる成果」が得られている。さらに、「利点2」の観点では、Aを上回る。「統計や調査」によれば、「優位性」が確認されている。「体験談」からも、その効果を実感している。

【総合的評価】（200字）

両者を比較すると、「判断基準」によって評価が変わる。「状況1」ではAが有効だが、「状況2」ではBが適している。重要なのは「本質的な視点」である。「自分の価値観」に基づけば、「選択/バランス」が最適だと考える。

【結論】（150字）

AとBの比較から、「発見や気づき」が得られた。「どちらか一方/両方のバランス」という結論に至った理由は、「核心的理由」である。今後は「実践や提案」していきたい。

テンプレート④：問題提起・解決型（1200字）

【現状認識】（200字）

「印象的な事例や統計」を目にして、衝撃を受けた。現代の〇〇は、「問題の描写」という深刻な状況にある。「具体的な数値」が示すように、もはや「緊急性」の問題となっている。なぜこのような事態になったのか。そして、どうすれば解決できるのか。

【問題の分析】（300字）

この問題の背景には、3つの要因がある。第一に、「要因1の説明」。「具体例」がその典型だ。第二に、「要因2の説明」。私も「体験」したことがある。第三に、「要因3の説明」。「データ」がこれを裏付けている。これらの要因が複雑に絡み合い、現在の状況を生み出している。

【解決策の提案】（400字）

では、どうすれば良いのか。私は3つの解決策を提案する。

まず、個人レベルでは「対策1」が重要だ。「実践例」のように、一人一人の意識改革から始めるべきである。
次に、組織レベルでは「対策2」が効果的だ。「成功事例」では、「成果」を達成している。さらに、社会レベルでは「対策3」という制度改革が必要だ。「海外事例」を参考に、「具体的な施策」を導入すべきである。

【実現への道筋】（200字）

これらの解決策を実現するには、「必要な条件」が不可欠である。特に「重要な要素」については、「具体的アクション」から始める必要がある。私自身も「個人的決意」し、「具体的な行動」を実践している。

【結論】（100字）

〇〇問題は、「本質」の問題である。しかし、「希望」も確実に存在する。「解決策」を着実に実行すれば、「理想の未来」は実現可能だ。今こそ「行動への呼びかけ」。

テンプレート⑤: 将来展望型(1000字)

【現在の自分】（200字）

私は現在、「状況」という立場にいる。「専攻や活動」を通じて、「獲得したもの」を身につけてきた。特に「強みや特徴」は、「具体的な成果」につながっている。しかし、「課題や不足」もまだ残されている。

【目指す将来像】（250字）

10年後、私は「具体的な姿」になりたい。「職業や役割」として、「社会的貢献」を果たす存在だ。「必要なスキル」を身につけ、「具体的な成果」を生み出している。「理想の生活や働き方」を実現し、「価値観」を大切にしながら生きている。

【実現への計画】（300字）

この目標を実現するため、段階的な計画を立てている。まず、今後1-2年は「短期目標」に集中する。「具体的な行動」を通じて、「獲得するもの」を身につける。

次の3-5年では、[中期目標]を達成する。[必要な経験]を積み、[スキルアップ]を図る。そして5-10年後には、[長期目標]を実現する。[具体的な到達点]まで成長することが目標だ。

【決意と展望】（250字）

もちろん、[予想される困難]もあるだろう。しかし、[過去の経験]が教えてくれたように、[信念]があれば必ず道は開ける。[サポートしてくれる人々]の期待に応え、[社会への恩返し]をすることが私の使命だ。
[時代の変化]を見据えながら、[柔軟性]も持ち続ける。
[最終的な夢]に向かって、一步步前進していく。

6. 効果的な書き出し集 50 選

インパクト型(10 選)

1. 「その一言が、私の人生を変えた。」
2. 「失敗から学ぶことの方が、成功から学ぶことより多い。」
3. 「午前3時、私はまだ研究室にいた。」
4. 「『無理だ』—その言葉が私に火をつけた。」
5. 「たった一つの決断が、すべてを変えることがある。」
6. 「沈黙の中に、真実が隠れていることがある。」
7. 「あの日見た景色を、私は一生忘れない。」
8. 「データは嘘をつかない。しかし、真実のすべてを語るわけでもない。」
9. 「『普通』であることを拒否した瞬間から、私の挑戦は始まった。」
10. 「99回の失敗が、100回目の成功を生み出した。」

問いかけ型(10 選)

11. 「なぜ人は、分かっているても行動できないのだろうか。」
12. 「成功とは何か。この問いに答えられる人はいるだろうか。」
13. 「もし時間を巻き戻せるなら、あなたは何をやり直したいか。」
14. 「テクノロジーは本当に私たちを幸せにしているのだろうか。」
15. 「努力は必ず報われるのか。」

16. 「リーダーとは何をする人のことを言うのだろうか。」
17. 「なぜ日本の若者は、リスクを避けるのか。」
18. 「学ぶことの本当の意味を、私たちは理解しているだろうか。」
19. 「競争は本当に必要なのだろうか。」
20. 「幸福の定義は、人によって違うのはなぜか。」

統計・データ型(10 選)

21. 「日本の大学生の 70%が、将来に不安を感じている。」
22. 「世界では、1 日に 15 万種の生物が絶滅している。」
23. 「2050 年、世界人口は 97 億人に達すると予測されている。」
24. 「日本人の平均読書時間は、1 日わずか 13 分だ。」
25. 「大学を卒業しても、3 人に 1 人は 3 年以内に転職する。」
26. 「スマートフォンを、私たちは 1 日平均 150 回確認している。」
27. 「地球の平均気温は、過去 100 年で 1.1 度上昇した。」
28. 「日本の労働生産性は、OECD 加盟国中 21 位である。」
29. 「SNS の利用時間と幸福度には、負の相関がある。」
30. 「AI により、現存する仕事の 49%が消滅と言われてている。」

体験・描写型(10 選)

31. 「震える手でマイクを握った瞬間、500 人の視線が私に集まった。」
32. 「図書館の静寂の中、ペンを走らせる音だけが響いていた。」
33. 「朝 5 時、誰もいないグラウンドで、一人黙々と走り続けた。」
34. 「初めて海外の地に降り立った時、世界の広さを実感した。」
35. 「祖父の皺だらけの手が、私の手をそっと包んだ。」
36. 「雨の中、泥だらけになりながら、最後まで諦めなかった。」
37. 「パソコンの画面に『合格』の文字が表示された瞬間、涙が溢れた。」
38. 「深夜のコンビニで働きながら、将来のことを考えていた。」
39. 「窓から差し込む朝日が、新しい一日の始まりを告げていた。」
40. 「電車の中で偶然聞こえてきた会話が、私の考えを変えた。」

格言・引用型(10 選)

41. 「『千里の道も一歩から』—この言葉を信じて歩み始めた。」
42. 「アインシュタインは言った。『想像力は知識よりも重要だ』と。」
43. 「『為せば成る』—この精神で困難に立ち向かった。」

44. 「ガンジーの『Be the change』という言葉が、私を動かした。」
 45. 「『継続は力なり』を、身をもって証明したい。」
 46. 「『失敗は成功の母』—この言葉に救われた経験がある。」
 47. 「『今を生きる』ことの大切さを、あの出来事が教えてくれた。」
 48. 「『人間万事塞翁が馬』—不運も幸運に変わることがある。」
 49. 「『初心忘るべからず』を胸に、原点を見つめ直した。」
 50. 「『一期一会』の精神で、すべての出会いを大切にしている。」
-

7. 締めめの文章パターン集

決意表明型

1. この経験を糧に、私は新たな一步を踏み出す。
2. 今日から私は、「具体的行動」を実践していく。
3. 失敗を恐れず、挑戦し続けることを誓う。
4. この学びを胸に、社会に貢献できる人材になりたい。
5. 小さな一步から始めて、大きな変化を生み出したい。

問いかけ型

6. あなたは、どんな未来を選択するだろうか。
7. 今、私たちに求められているのは何だろうか。
8. この問題に、私たちはどう向き合うべきか。
9. 次の世代に、何を残すことができるだろうか。
10. 変化を恐れるか、それとも受け入れるか。

展望型

11. この先に待つ未来は、きっと明るいはずだ。
12. 新しい時代の扉が、今まさに開かれようとしている。
13. 可能性は無限大だ。あとは実行あるのみである。
14. 道は陰しいが、頂上からの景色は素晴らしいだろう。
15. 種を蒔いた今、やがて大きな実りを得られると信じている。

教訓型

16. 挑戦なくして成長なし-これが私の学んだ真理だ。
 17. 人は一人では生きていけない。支え合いこそが力となる。
 18. 完璧を求めるより、前進することの方が重要だ。
 19. 答えは外にではなく、自分の中にある。
 20. 変わることを恐れてはいけない。変化こそが成長だ。
-

Part 3: 分野別レポート見本

9. 文系レポート見本(5 種類)

①文学レポート例(1600 字)

【タイトル】

夏目漱石『こころ』における近代的自我の相克

【序論】

夏目漱石の『こころ』（1914）は、明治時代の知識人の内面的葛藤を描いた作品として知られている。特に「先生」と「私」の関係性には、近代日本における自我の問題が凝縮されている。本レポートでは、作品における近代的自我の相克を、エゴイズムと倫理観の対立という観点から分析する。

【本論】

1. 「先生」の内的葛藤

「先生」の自我は、親友 K を裏切った罪悪感と、お嬢さんへの愛情の間で引き裂かれている。「私は自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた」（p. 234）という告白は、近代的個人主義の体現者としての自己認識を示している。しかし同時に、「罪悪」という倫理的な重荷も背負っており、この二重性が「先生」の悲劇を生み出している。

2. エゴイズムの肯定と否定

作品は、近代的自我のエゴイズムを肯定も否定もしない

両義的な立場を取る。「先生」の行為は確かに利己的だが、その後の苦悩は倫理的な意識の表れでもある。漱石は「則天去私」を晩年の理想としたが、この作品ではむしろ「私」を去ることの困難さが描かれている。

【結論】

『こころ』における近代的自我は、個人の自由と社会的倫理の間で引き裂かれた存在として描かれている。この相克は、現代の我々にも通じる普遍的な問題であり、漱石文学の現代性を示している。

【参考文献】

夏目漱石（1914）『こころ』岩波文庫.
江藤淳（1970）『漱石とその時代』新潮社.

②歴史レポート例(1800字)

【タイトル】

明治維新における廃藩置県の歴史的意義

【序論】

1871年（明治4年）に断行された廃藩置県は、日本の近代化において最も重要な改革の一つである。約260の藩を廃止し、中央集権的な県制度を導入したこの改革は、どのような歴史的意義を持つのか。本レポートでは、政治・経済・社会の3つの側面から考察する。

【本論】

1. 政治的意義：中央集権国家の確立

廃藩置県により、各藩の自治権は完全に否定され、中央政府による統一的な支配が確立した。これは、欧米列強に対抗しうる近代国家建設の基礎となった。知藩事の東京移住により、地方の抵抗力も削がれた。

2. 経済的意義：統一市場の形成

藩の境界が撤廃されたことで、関所や藩札が廃止され、全国的な市場経済が成立した。これにより、資本主義

経済の発展が可能となり、殖産興業政策の基盤が整った。

3. 社会的意義：身分制度の実質的解体

藩という封建的単位の解体は、士農工商の身分制度の実質的な終焉を意味した。四民平等の理念が現実化し、近代的な国民意識の形成につながった。

【結論】

廃藩置県は、日本を封建国家から近代国家へと転換させた画期的改革であった。その成功は、後の急速な近代化を可能にし、アジアで最初の立憲国家誕生への道を開いた。

【参考文献】

坂野潤治（2012）『日本近代史』ちくま新書.

三谷太一郎（2017）『日本の近代とは何であったか』岩波書店.

③社会学レポート例(2000 字)

【タイトル】

現代日本における「ひきこもり」現象の社会的考察

【序論】

内閣府（2023）の調査によれば、日本の「ひきこもり」人口は約 146 万人に達している。この現象は、単なる個人の問題ではなく、現代日本社会の構造的問題を反映している。本レポートでは、社会的観点から「ひきこもり」現象を分析し、その社会的要因を明らかにする。

【本論】

1. 「ひきこもり」の定義と現状

厚生労働省は「ひきこもり」を「6 ヶ月以上自宅にとどまり続けている状態」と定義している。年齢層は 15 歳から 64 歳まで幅広く、もはや若者だけの問題ではない。特に「8050 問題」は深刻化している。

2. 社会的要因の分析

第一に、日本の「世間」という同調圧力が要因として挙げられる。阿部（2020）は、「空気を読む」文化が生み出す息苦しさを指摘している。第二に、新自由主義的な競争社会の圧力がある。正規雇用への道が狭まり、「勝ち組」「負け組」の二極化が進んでいる。第三に、家族関係の変容も影響している。核家族化により、問題が家庭内に閉じ込められやすくなった。

3. 国際比較からみる日本の特殊性

韓国の「ニート」、イタリアの「ボンボーネ」など、類似現象は他国にも存在する。しかし、日本の「ひきこもり」の規模と期間の長さは突出している。これは、日本特有の「恥の文化」と関連していると考えられる。

【結論】

「ひきこもり」は、現代日本社会の矛盾が個人に集約された現象である。解決には、個人へのケアだけでなく、社会構造の変革が必要である。多様な生き方を認める寛容な社会の実現が求められている。

【参考文献】

内閣府（2023）『ひきこもりに関する実態調査』内閣府.
阿部真大（2020）『ひきこもりの社会学』世界思想社.
斎藤環（2019）『ひきこもり文化論』筑摩書房.

④哲学レポート例(1500 字)

【タイトル】

カントの定言命法と現代の応用倫理学

【序論】

イマヌエル・カント（1724-1804）が提唱した定言命法は、「汝の意志の格律が常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」という道徳法則である。この18世紀の倫理学理論は、現代の応用倫理学においてどのような意義を持つのか。本レポートでは、生命倫理を

例に検討する。

【本論】

1. 定言命法の基本原則

カントは、道徳的行為の基準を「普遍化可能性」に求めた。ある行為が道徳的であるためには、それがすべての人に当てはまる法則となりうる必要がある。これは、人間を「目的それ自体」として扱うことを要求する。

2. 生命倫理への応用

安楽死の是非を定言命法で考えると、複雑な問題が生じる。「苦痛から逃れるために死を選ぶ」という格律は、普遍化すると生命の価値を否定することになりかねない。しかし、「尊厳ある死を選ぶ権利」と捉え直せば、異なる結論も可能である。

3. 現代的意義と限界

定言命法は、普遍的な道徳基準を提供する点で今日でも有効である。しかし、文化相対主義や状況倫理学からの批判もある。特に、グローバル化した現代では、普遍性の概念自体が問い直されている。

【結論】

カントの定言命法は、現代倫理学においても重要な指針となりうる。ただし、その適用には文脈への配慮と批判的検討が不可欠である。

【参考文献】

カント, I. (1785) 『道徳形而上学原論』篠田英雄訳, 岩波文庫.

⑤心理学レポート例(1800字)

【タイトル】

大学生の SNS 利用とメンタルヘルスの関連性

【序論】

大学生の SNS 利用時間は年々増加しており、それに伴いメンタルヘルスへの影響が懸念されている。本レポートでは、先行研究のレビューと独自の調査結果を基に、両者の関連性を検討する。

【方法】

大学生 100 名（男性 45 名、女性 55 名、平均年齢 20.3 歳）を対象に、SNS 利用時間と GHQ-28（精神健康調査票）によるメンタルヘルス評価を実施した。

【結果】

SNS 利用時間と GHQ スコアの間に、中程度の正の相関（ $r=0.45$, $p<0.01$ ）が認められた。1 日 3 時間以上利用する群は、1 時間未満の群と比較して、抑うつ傾向が有意に高かった（ $t=3.82$, $p<0.001$ ）。

【考察】

結果は、過度の SNS 利用がメンタルヘルスに負の影響を与える可能性を示唆している。これは、社会的比較理論で説明可能である。SNS 上での他者との比較が、自己評価の低下につながると考えられる。

【結論】

大学生の SNS 利用とメンタルヘルスには有意な関連が認められた。適切な利用指導の必要性が示唆される。

【参考文献】

高橋美保（2022）「若者の SNS 依存」『心理学研究』93 巻, pp. 234-245.

10. 理系レポート見本(5 種類)

①物理学実験レポート例(2000 字)

【タイトル】

単振り子による重力加速度の測定

【目的】

単振り子の周期測定から重力加速度 g を求め、理論値と比較することで、測定の妥当性を検証する。

【理論】

単振り子の周期 T は、振り子の長さを L 、重力加速度を g とすると、

$$T = 2\pi\sqrt{L/g}$$

で表される。これより、

$$g = 4\pi^2 L/T^2$$

となる。

【実験方法】

1. 実験装置：糸（1m）、おもり（50g）、ストップウォッチ、メートル尺
2. 手順：
 - (1) 振り子の長さ L を 0.5m、0.6m、0.7m、0.8m、0.9m に設定
 - (2) 各長さで振幅 5° 以下で 10 周期の時間を 5 回測定
 - (3) 平均値から 1 周期 T を算出

【結果】

表 1 に測定結果を示す。

[測定データの表]

最小二乗法により、 $g = 9.78 \pm 0.05 \text{ m/s}^2$ を得た。

【考察】

測定値 9.78 m/s^2 は、理論値 9.80665 m/s^2 と 0.3% の誤差で一致した。誤差要因として、空気抵抗、糸の質量、振幅の影響が考えられる。特に振幅が大きい場合、単振動の近似が成立しなくなる。

【結論】

単振り子を用いて重力加速度を高精度で測定できることが確認された。測定精度向上には、真空中での測定や、光センサーによる周期測定が有効と考えられる。

【参考文献】

小出昭一郎（2017）『物理学』裳華房.

②化学実験レポート例(1800 字)

【タイトル】

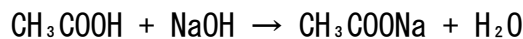
中和滴定による酢酸の定量分析

【目的】

未知濃度の酢酸溶液を、既知濃度の水酸化ナトリウム水溶液で中和滴定し、酢酸の濃度を決定する。

【原理】

酢酸 (CH_3COOH) と水酸化ナトリウム (NaOH) の中和反応は、



で表される。当量点では、 $n(\text{CH}_3\text{COOH}) = n(\text{NaOH})$ となる。

【実験操作】

1. 試薬：0.1M NaOH 標準溶液、未知濃度酢酸溶液、フェノールフタレイン
2. 器具：ビュレット、ホールピペット、コニカルビーカー
3. 手順：
 - (1) 酢酸溶液 10.0 mL をホールピペットで採取
 - (2) 指示薬を 2-3 滴加える
 - (3) NaOH 溶液で滴定（無色→淡紅色）
 - (4) 3 回繰り返し測定

【結果】

滴定値：12.45 mL、12.50 mL、12.48 mL

平均値：12.48 mL

酢酸濃度：0.1248 M

【考察】

3 回の測定値のばらつきは 0.05 mL 以内であり、再現性は良好であった。終点の判定における主観的誤差を減らす

ため、pH 測定器の使用が望ましい。

【結論】

中和滴定により、未知酢酸溶液の濃度を 0.1248 M と決定した。相対誤差は 0.4%以内と推定される。

【参考文献】

日本化学会編（2020）『実験化学講座』丸善出版.

③生物学実験レポート例(2000 字)

【タイトル】

顕微鏡観察による植物細胞と動物細胞の比較

【目的】

タマネギの表皮細胞とヒト口腔粘膜細胞を観察し、植物細胞と動物細胞の構造的差異を明らかにする。

【材料と方法】

材料：

- タマネギ表皮
- ヒト口腔粘膜細胞
- 染色液（酢酸カーミン、メチレンブルー）

方法：

1. プレパラート作成
2. 染色（各 5 分間）
3. 顕微鏡観察（100 倍、400 倍）
4. スケッチと写真撮影

【結果】

1. タマネギ表皮細胞
 - 細胞壁：明確に観察された
 - 核：球状、細胞中央付近
 - 液胞：大型、細胞の大部分を占める
 - 葉緑体：表皮細胞のため観察されず

2. ヒト口腔粘膜細胞

- 細胞壁：観察されず
- 核：扁平、細胞中央
- 細胞質：全体に分布
- 細胞の形状：不規則

【考察】

植物細胞の特徴である細胞壁と液胞が明確に観察された。細胞壁はセルロースから成り、植物体の支持に寄与している。一方、動物細胞は細胞壁を持たず、形状が柔軟である。この違いは、両者の生活様式の違いを反映している。

【結論】

顕微鏡観察により、植物細胞と動物細胞の基本的な構造的差異を確認できた。特に細胞壁の有無は、両者を区別する重要な特徴である。

【参考文献】

Campbell, N.A. et al. (2018) Biology. Pearson.

④工学実験レポート例(1800 字)

【タイトル】

RLC 直列回路の周波数特性測定

【目的】

RLC 直列回路の周波数特性を測定し、共振周波数と Q 値を求める。理論値と比較し、回路の動作を検証する。

【理論】

RLC 直列回路のインピーダンス Z は、

$$Z = R + j(\omega L - 1/\omega C)$$

共振周波数 f_0 は、

$$f_0 = 1/(2\pi\sqrt{LC})$$

Q 値は、

$$Q = (1/R)\sqrt{L/C}$$

【実験方法】

使用機器：

- 信号発生器、オシロスコープ、デジタルマルチメータ
- $R = 100\Omega$ 、 $L = 10\text{mH}$ 、 $C = 0.1\mu\text{F}$

手順：

1. 回路を構成
2. 周波数を $100\text{Hz} \sim 100\text{kHz}$ で変化
3. 各周波数で電圧・電流を測定
4. インピーダンス、位相を算出

【結果】

共振周波数： $f_0 = 5.03\text{kHz}$ （理論値 5.03kHz ）

Q 値： $Q = 3.14$ （理論値 3.16 ）

[周波数特性グラフ]

【考察】

実験値は理論値とよく一致した。わずかな誤差は、素子の許容誤差（ $\pm 5\%$ ）と測定誤差に起因する。共振点での位相は 0° となり、理論通りの動作を確認した。

【結論】

RLC 回路の周波数特性を測定し、共振現象を確認した。この原理は、フィルタ回路やチューニング回路に応用される。

【参考文献】

大野克郎（2019）『電気回路』オーム社.